

1 実施日時 令和7年12月6日（土）11時00分から16時00分まで

2 実施場所 グランシップ 10階 1001-1（静岡市駿河区東静岡 2-3-1）

3 実施内容

(1) タイトル 「静岡でHYGGEを知ろう！ 身近なところで幸せを感じてみませんか」

(2) 内容

- ・デンマーク式ヒュッグ、静岡式ヒュッグの体験ブース（デンマークのお茶、静岡茶の提供）
- ・デンマーク在住の方へのヒュッグについてのインタビュー掲示
- ・静岡産業大学経営学部、岩本武範教授によるウェルビーイング講座
- ・アート作家、利根川初美氏によるハッピーペンダント作り
- ・ワークショップ幸せノート作り

4 プロジェクトの概要

<テーマ設定>

日本は世界幸福度ランキングで55位とG7最下位に位置し、身近な幸せを感じにくい社会だと感じています。チームリーダーはこの課題に関心を持ち、昨年8月に幸福度ランキング2位のデンマークへ留学しました。そこで、「ヒュッグ」という家族や友人と過ごす心地よい時間や空間を意味する言葉を知り、その空気感を肌で感じ、幸福度を高めるには、多様な価値観や幸福について考



え、それを表現できる社会が必要だと学びました。そして静岡でもヒュッグのような文化を広めたい、幸福を身近に感じる機会を作りたいと考え、ドリームプロジェクトに応募し、デンマークの「ヒュッグ」に着目したイベントを企画しました。イベントでは①ヒュッグを知り、感じる体験、②ヒュッグをつくり、表現する体験を通して、居心地の良い時間を共有し、幸せについて考えるきっかけを提供することを目指しました。

<イベント実施までのプロセス>

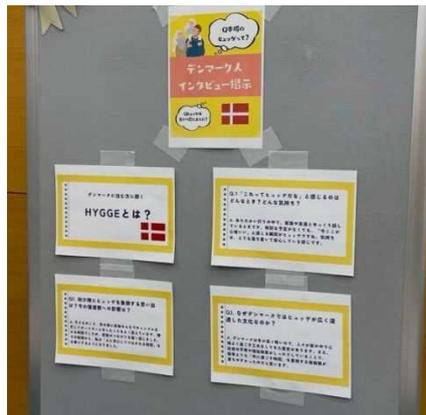
- ・6月下旬 計画開始
- ・7月 講師打ち合わせや予算、開催場所等の確定
- ・9月～ チラシづくり
- ・10月下旬～ 広報活動開始(地域の施設でのチラシ設置、instagramの運用、学校内での広報)
- ・11月 静岡新聞社からの取材
- ・12/06(土) イベント当日

<イベント当日>

来場者 35 人、取材一件(静岡新聞)



幸せ共有コーナー



HYGEE の説明



岩本氏による講演



岩本氏と参加者



利根川氏とアシスタント長野氏によるハッピーペンダント作り



ワークショップ幸せノート作りでの作品



利根川氏、長野氏とスタッフ



運営ボランティアの皆さん

5 感想

自分たちで一から企画を考え、イベントを運営することは初めての経験で、準備段階から当日まで多くの壁に直面しました。イベント内容を練る中では、「どのような人に来てほしいのか」「何を持ち帰ってもらいたいのか」を明確にすることの難しさを感じ、理想だけでなく、集客や参加者の視点を意識した企画づくりの大切さを学びました。自分たちが伝えたい想いと、人を惹きつける魅力をどのように両立させるかを考えながら、何度も話し合いを重ねました。また、広報活動では思うように参加者が集まらず、試行錯誤の連続で

した。さらに、講師の方をはじめとする大人の方々とのやり取りでは、連絡や対応の難しさを実感し、不十分な点でご迷惑をおかけしてしまったこともありました。しかし、多くの方に支えていただきながら、その一つ一つを学びに変えて取り組むことができました。そして、自分たちが一から考えた企画が、多くの方々に関わっていただいたことで無事に成功させることができました。今回のイベントを通して特に強く感じたのは、幸せの形は人それぞれであるということです。はじめは「幸福」や「ウェルビーイング」といった抽象的で明確な定義を言語化しにくい概念に難しさを感じていましたが、当日に教授のお話を聞いたり、来場者や運営スタッフと穏やかな時間を共有したりする中で、日常にあるささやかな心地よさを実感することができました。来場者に幸せを書いてもらう「幸せ共有コーナー」には、「新しい発見をして人の役に立っている時」、「スマホから離れて家族や友達と過ごす時」、「一人で集中して何かに取り組んでいる時」など多様な価値観が付箋に表れており、自分一人の視点だけでなく、誰かの幸せに触れることで、自分の世界が少し広がったように感じました。また、「幸せは自分の手の中にある」ということを改めて実感するとともに、忙しい日々の中で立ち止まり、幸せについて考える時間が、多くの人にとって幸せのきっかけづくりにつながるのだと感じました。

高校生だけで企画から運営まで行うことは、時間の確保や計画の面で大変なことも多くありましたが、来場者の方から「癒やされた」「またやってほしい」という言葉をいただけたことは、大きな喜びであり、自信につながりました。「伝えたいことを、どのようにすれば多くの人に受け取ってもらえるのか」という問いと向き合い続けた経験は、企画・広報の両面での成長につながり、高校生のうちにこのようなイベント運営を経験できたことは、非常に貴重な学びとなりました。この経験を、今後の探究型イベントの実現や、大学進学後の進路などに活かしていきたいです。